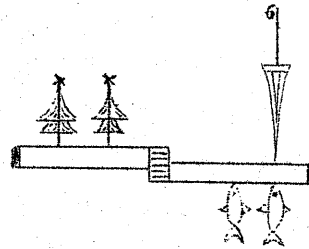


きはきしていてからつと明るいあたり、別にいばっているわけではないがこれが上州名物の本体かなど合奏した次弁である。

(オニ回生 建設省国土地理院)



都立大学に学んで

植 材 靖 子

私がお茶大から都立大学社会学科に学んだ理由はいろいろありましたが、その大きな要素は、人文地理学というのはもつと人向くさい学問なのではないかという漠然とした疑問からでした。最後学年になって卒論をかかねばならなくなつた頃、いろいろな大学から学生が集まって、色々な学問的意図に基いた総合的農村調査が行われ参加したわけですが、その学問的成果はともかくとして、それぞれの学問の場について話しあえる横のつながりが多少ともできたことは、私共参加者にとって大きな収穫であつたといえましょう。調査の中での話しあいの場で、人文地理学を学んでいる以上は、社会科学のベースを形成している経済学や、人文現象の中で絡みあつている人間関係などについてもつと知るべきであることがわかりましたが、その時はすでに大学生活を終ろうとしていたのです。その後運良く都立大に学士入学することができ、更に三年間在学することになりました。その間の学園生活について、簡単に御紹介してみたいと存じます。

都立大学は伝統のない新制大学ですが、マンモス大学とは異なり、少数の学生から構成されているところに特色がございます。例えば社会学でも毎年平均5、6人ならば多い方で、年によりますと1人位しか（もつとも留年組もおりますが）卒業生の出ないこともあります。社会学は更に社会学専攻と社会人類学専攻に分かれ、学問領域としては、前者は近代以後の社会に関する実証的研究が多く、後者は主に未開社会を対象としているのですが、週一回のゼミナールでは合同して同じテーマを論じあつております。私は農林社会学を専攻いたしましたので、社会人類学の様子はいくわしくはわかりませんが、新進鋭の若い学者グループである青年人類学グループによる研究（アフリカや東南アジアの未開社会に関する研究など）は学界でも高く評価されております。

一方社会学は、都市社会学的 성격が強いのですが、これは磯村英一教授や「暴力」の岩井弘融助教授、ソシオメトリーの大堀助教授などがおられるので当然かと思われます。その他「家族」の小山隆教授をテーマとする家族問題研究会も、地味ながら現代的課題にそった研究により成果をあげておられます。なんといつても学生数が少ないので、時にはゼミナールの時間、先生方よりも学生の方が少なく、大へんしぼられるので出席した学生こそ運が悪いといわなければなりません。それだけに学問に対する「熱」次第でよく勉強できる場所でもあります。また何かしらの調査をやっておりますので、学生はその調査の中から実証的研究のあり方や、卒論のテーマについて考えたり、討論しあつたりしております。

しかし徒らに意味のない数字をいじくりまわしているというわけではなく、社会学の理論や方法論は地理学よりはつきりしておりますので、基礎的学問をふまえた上に積み重ねられたものであれば、自分なりに方向づけができるわけです。

社会学研究室は、私の在学中はいく分サロンのムードがありすぎる感はありましたが、それだけに学生は気軽に出入りして先生方との話し合いの場をつくっていたようです。これには大てい「紅茶」にありつけるというささやかな期待も手伝っていたかかもしれません。私がとつた講義の中に殆んど先生と一対一というのがありましたが、お互いにさぼるにさぼれず、最後まで神妙に出席致しました。2、3人の講義はざらで、喫茶店で講義をきいたこともありましたが、却って雑誌の中から身になるようなものが得られたようです。

時には多忙の若い先生を海や山にひっぱり出して学生は結構楽しんでいただいているように思えます。毎年春、先生方全部とオノ田の卒業生から最も新しい卒業生までといつても、卒業生全部で四十名位ですが、新らしく卒業する学生の送別会をかねて近い所に旅行いたします。普段からタテの関係も割合緊密なせいも、また私のようなフリコミ学生は、上級生下級生の区別がつかなくて一語にワイワイさわいでおります。

現在都立大で社会学を学び、現場の教師をしている5、6名が集つて、中学、高校生の職業意識、態度及び卒業後の彼らの価値意識、態度の要容をテーマに研究会をもつておりますので、卒業後も研究室に時々通つております。

以上私が社会学を学んだといつても、地理学の立場から社会科学を共通の範疇とする隣接科学の社会学をチョッピリのぞいた程度にすぎないのです。

(オ四回生 順心女子学園)